



研究だより

2020年 1月 7日
NO. 23
4年担任

字報の聴く力をつけるには・・・

○ジャンプ問題を考えていくと、子ども達の反応からこんな問題がいいジャンプ問題なんだろうなあと思う。

- ①一人では絶対に解決することが難しく、何人かで考え進めなければ糸口が見つからない難しい問題
- ②問題を何度も考え直すことができる問題
- ③いろいろな考え方が出てくることで、友達の考えを聴きたくなる問題

聴く力が大事

実態に合った つなぎ方や共有の仕方にとまどう

○しかし、たとえこのようなジャンプ問題が用意できたとしても、いろいろな要因で深まらせることができない授業が私には多くあった。授業のコーディネート力ということが大きい。ジャンプ問題は準備する教材研究の時間を日々とっているものの・・・共有場面でどうするか・・・授業最中にわからなくなる場面が多い。

- ①問題に時間が十分にとれなかったとき。☞研究授業で前置きなしでやってみた。手ごたえ有り。
- ②児童の発表計画が綿密でないとき。☞考えが深まらず拡散して集中力がないと聴くことができなくなる。
- ③発表力のある児童や分かる児童だけ活躍するとき。☞他児につないだり、全体に返したりして考えさせる。
- ④班での話し合いが停滞したとき☞停滞している原因と投げかける言葉、関わり方の見極め。
- ⑤全体の共有場面で、どこまで子どもに任せてよいか迷ったとき。☞はっきりと教師側で言葉を教えたり整理したりする必要がある内容や場面を把握。

○まず一つは、教師のファシリテーターの役割を認識することが課題だ。

- ・ジャンプ問題がすぐに考え始められるように、問題への質問がでないように説明していた。それさえも児童から出てくるのがジャンプ問題への学びの気づき段階なのであるから、説明しなくてよい。親切のつもりがやる気を削いでいた。
- ・考えが整理され、深まるように発表計画を立てることが瞬時に求められる。また、どれがよりよい求め方なのか考えさせること、はっきりと伝えることも必要。順番を考えないとよりよい考え方や式が見えなくなることもある。
- ・あまりにも「友達の考えを自分の言葉で言えるのが理解したこと」と思いすぎ、つないでいると思いきや、理解していることよりは友達の言葉を暗記して言うことに終始してしまった。計算の仕方や式の説明になってしまい、なかなか言葉の広がりもなく、説明しようがないところに時間をかけすぎていた。結果聴く要素がなく、飽きて集中力がとぎれる。可視化しやすい面積の単元では、図形があるために非常に考えを伝えやすく、考え方の部分では友達と伝え合い易いし、同じ土俵に上がりやすい。面積でも式の説明になってしまいがちだったが、考え方の説明として「どこで2つの長方形に分けて足したのか」「どの長方形からどの長方形を引いたのか」など簡潔に言えるように導いていくことが考え方の違いを聴くことにつながるし、聴きたいポイントになって説明が分かりやすくなる。
- ・教師が前に出すぎて授業を引っ張ってしまうのはよくないと思い込みすぎ、あやふやなままで終わってしまうことがあった。一辺が1cm、1m(100cm)、10m、100m、1km(1000cm)の面積を一覧にして整理すること、がい数にするときの言葉のパターン(〇〇の位までのがい数・上から〇けたの概数・〇〇の位で四捨五入)を整理して四捨五入の位置を確認することなど、迷いがちな箇所を迷わずに明確にしておく大切な役割がある。

○次に、土台となる人間関係を授業や授業外でも耕しておくことが課題だ。

- ・まずやってみようという勇氣、失敗しても成功しても一人だけでも笑われたり非難されたりしない安心できる人間関係をどう築くか。より深い学びに向かうには、ジャンプ問題だけで限りがあると感じている。
- ・わかる人が教えてるのでなく、わからなければ「わからない」「どうして」と訊く意識を伝えていく。
- ・「わからない」と言って説明してもらった後、人の考えを素直に受け入れて考えてみようとする態度を育てたい。取り組もうとせず、全体で結果が出てからノートに写す児童を授業場面でつないでいきたい。